

Let's try ACP

実践
ルポ

楽しいがいっぱい!

子どもたちに体を動かすことの楽しさを伝え、運動・スポーツに対する積極性を引き出すアクティブ・チャイルド・プログラム（以下、ACP）。日ごろの指導においてACPを実践することで、子どもたちの動きは生き生きしてくるはず。子どもたちを楽しく遊ばせるためのヒントを集めてみた！



笑顔で「ことろことろ」を楽しむ学生たち

連載〈第11回〉

保育士、幼稚園教諭の 養成カリキュラムにACPを 活用して、より楽しく、効果的に

きっかけは ACPガイドブック

札幌国際大学短期大学部（北海道札幌市清田区）の幼児教育保育学科に、今年度より着任し

た林二士講師は、ACPを活用した講義をスタートさせた。長年にわたり千葉県内で、幼児教育や運動遊びに関する独自の活動を展開してきた林先生。千葉から1100kmも離れた北海道で、

保育士や幼稚園教諭をめざす学生たちを相手に教へんをとることになったのも、その実績をかわれてのものだ。

「ライフワークとして、子どもの運動遊びと健康づくりに力を入れてきました」という林先生にどう

て、運命的な出会いとなつたのがACPだ。

「子どもの運動遊び

に二十数年携わってき

て、私が保護者の皆さんに伝えてきたこと

と、「幼児期からのACP」ガイドブック

（以下、ACPガイドブック）に掲載されている内容がほとんど同じでした。しかも、すごく簡潔にまとまっている。「これがあれば伝えやすくなる」と思いました。実践してきた運動遊びや理論が多く掲載されていたので、活用はまったく問題ありませんでした」

林先生は現在、1年生の必修科目で「保育内容 健康」などを担当。2年生には、専門科目のほかに、「運動遊び」をテーマにしたゼミを開講している。

幼児期からのACP普及講習会と同講師講習会の修了生でもある林先生は、講習会で配布されたACPガイドブックやスライドファイルなどを講義で活用。さ



監修／佐藤善人
東京学芸大学教育学部准教授

写真／上野公人 イラスト／IKUKO

学生たちは、”とにかく1日60分以上体を動かせばいいんだね”と感想を教えてくれます。学生もピンとくるみたいですよ」

「学生にはACPガイドブックの存在を伝え、興味のある学生には配布もしています」と言う林二士先生

教室で運動遊びの理論を講義する林先生



「子どもたちとの接し方がわかつてきた」と言う森夢奈さん

「子どもたちとの接し方がわかつてきた」と言う森夢奈さんは、1985年の水準と同程度である子どもたちの体力は、体力がピークだったと言わわれています。すると

「例えは、身体活動量と体力の関係を示したスライドを解説する」と学生たちはたいへん関心をもつてくれます。このスライドでは、1日60分以上体を動かしている子どもたちの体力は、体力が

「遊びが大切」というテーマでACPに関する理論と実技を6

回行い、最終的に指導案の作成という課程になっています。つまり、遊びを通した健全な発育発達を伝えていく流れになっているわけです。本学科の学生は卒業後、90%以上が保育士や幼稚園教諭になります。そのため、運動遊びが重要なことは、まず伝えておかなくてはいけません」

林先生が学生の前に立って、「大根抜き」などの「アイスブレイキング」、音楽に合わせての「動きづくり」、「縄」や「新聞」、「ボール」を使用した遊び、「鬼ごっこ」等を紹介していく。幼稚園の学生たちは、それらの運動遊びを楽しそうに実践していく。

「この『保育内容健康』のカリキュラムでは、前半で『子どもの健康とは、子どもの心の発達』、『子どもたちの心の発達』、『生活習慣の発達』などを学びます。その後、遊びが大切」というテーマで

次に林ゼミの学生による模擬指導を見学した。こちらは「幼児カリキュラムの課程としては、前期の授業『体育実技』において学生たちが運動遊びの楽しさを経験したうえで、後期の授業『保育内容 健康』で運動遊びの意義や趣旨、指導方法を学んでいく」というステップが組まれている。運動遊びを実体験することで、学生たちはその重要性と楽しさを発見していくことになる。学生たちは子ども時代に戻ったように、笑顔で運動遊びを楽しんでいた。

「体を動かす『鬼ごっこ』は必ずぶんやつていなかつたので、楽しかつたです。保育園での実習も経験しましたが、幼児たちと触れ合うだけで、自分が指導すると幼児にかけることばの難しさを感じますね。どのように声をかければ、子どもたちのやる気を引き出せるかを考えるようになりました」



「新聞」を使った運動遊びの指導案を発表したゼミ生たち



「新聞」は細かく刻まれて、最後は「ボール」に変わる(次ページの「ここがポイント!」参照)

学生たちは、”とにかく1日60分以上体を動かせばいいんだね”と感想を教えてくれます。学生もピンとくるみたいですよ」

「学生にはACPガイドブックの存在を伝え、興味のある学生には配布もしています」と言う林二士先生

出席した森夢奈さんにとって有意義な授業になったようだ。

からのACP」を極めることが最後のテーマになっていた。

ACP講師講習会方式の 養成カリキュラム

回行い、最終的に指導案の作成という課程になっています。つまり、遊びを通した健全な発育発達を伝えていく流れになっているわけです。本学科の学生は卒業後、90%以上が保育士や幼稚園教諭になります。そのため、運動遊びが重要なことは、まず伝えておかなくてはいけません」

カリキュラムの課程としては、前期の授業「体育実技」において学生たちが運動遊びの楽しさを経験したうえで、後期の授業「保育内容 健康」で運動遊びの意義や趣旨、指導方法を学んでいく」というステップが組まれている。運動遊びを実体験することで、学生たちはその重要性と楽しさを発見していくことになる。学生たちは子ども時代に戻ったように、笑顔で運動遊びを楽しんでいた。

「特に、ACPガイドブックの「よい指導者としての観点」(P79)や「指導のコツ」(P82~90)については、学生にいちばん学んでも

グループに分かれて作成した指導案を基に、「アイスブレイキン」「新聞・縄・ボール」「鬼ごっこ」の3つのテーマで、各グループが模擬指導を実施。その後、林先生が

指導を見学した。こちらは「幼児カリキュラムを極めろ!!」と題された研究テーマの4回目。「運動遊び」が研究テーマの林ゼミでは、「鬼ごっこ」を極めろ!!」「縄遊びを極めろ!!」「新聞遊びを極めろ!!」「ボール遊びを極めろ!!」「縄遊びを極めろ!!」と、

導技術のポイントを説明していくスタイルで行われた。ここで林先生が特にポイントとして指摘したのが、「よい指導者としての観点」と「指導のコツ」だった。

「特に、ACPガイドブックの「よい指導者としての観点」(P79)や「指導のコツ」(P82~90)については、学生にいちばん学んでも

「特に、ACPガイドブックの「よい指導者としての観点」(P79)や「指導のコツ」(P82~90)については、学生にいちばん学んでも

らいたい部分です。この部分を指導するときは、自分の経験も踏まえた具体例を交えて紹介する

と、学生も理解が深まるようになります。模擬指導の講評でも、その点を交えて説明しました。実は、1年生前期の体育実技の講義において、運動遊びをたくさん経験させたあとに、指導案を作成してもらいました。しかし、十分な結果が得られず、やはり指導に関するキモの部分はしっかりと教えておかなくてはダメだと反省しました。

ゼミでは指導法・指導技術をしっかり学習したうえでの指導案作成になっています」

ゼミ生たちに、模擬指導の感想を聞いてみよう。

「私は体を動かすのが好きなので、運動遊びについてより学びたいと考えて、林ゼミに入りました。子どものころは知らず知らずのうちに体を動かしていましたが、ACPではきちんと理論づけて学びます。子どもたちにとっては遊びだけど、保育士にとっては遊びです。あらためてすごいと思いました」(児玉恵理さん)

「ACPは以前から知っていて、ガイドブックも持っていました。だから、指導案作りは楽しかったです。林先生が指導している親子の運動遊びにも補助で参加して、

「将来は子どもたちにスポーツの楽しさを伝える人になりたい」と夢を語る谷川蘭さん



「指導案は細かい部分まで詰められなかった」と残念がる児玉恵理さん

と、とても楽しみです」

■

蘭さん

とても勉強になっています」(谷川

佐藤善人先生は、札幌国際大学短期大学部のACPを活用したカリキュラムに関して、次のように期待をかける。

「1年生のときは幼児の健康や運動遊びに関して、学生に広く周知させるカリキュラムが組まれています。ちょうどACP普及講習会のようです。その中から何人かが絞り込まれて林ゼミに入り、さらに深く学んでいきます。つまり講師講習会のようなイメージです。このように、林先生のもとで児童体育や運動遊びについて学び、ACPの活用も経験した学生たちが、保育園や幼稚園、施設へと就職して、今後どのように活躍していくのか、将来を考えると、とても楽しみです」



『児童期からのACP』の「4章 幼児の指導法・指導技術」も参考にしてください。(QRコード参照)。

ACP ここがポイント!

今回、林先生が「運動遊びの指導法」のキモとして強調されたのが、「よい指導者としての観点」と「指導のコツ」でした。ACPガイドブックに掲載された内容を参考に、その中から重要なポイントを抜き出して、学生たちにキーポイントとして示しました。また林先生の経験に基づく具体例を入れて説明したこと、学生たちには理解しやすい工夫がされていました。ここでは、林先生が「指導のコツ」とした項目の中から3つをピックアップして紹介しましょう。

まずはからだを動かす(時にはあいさつもそこそこに)

→集まった子どもから遊びの輪を広げる

1年生の講義のスタートでは、林先生の「はじまるよー、はじまるよー」という掛け声に対して、学生たちも「はじまるよー」と応えて手遊び「はじまるよ」をしながら集まり、ムードが一気に盛り上がっていました。そのような雰囲気を引き継ぎ、すぐにさまざまな運動遊びが展開されていました。

環境を通じて動きを引き出す

→わかりやすい目標を示す。そのつど運動の成否を示す



「はじまるよー、はじまるよー」と手拍子で雰囲気づくり

風船の周りを新聞で囲ったり、破った新聞をビニール袋に詰めたりと、転がりにくいボールを作ることで、子どもの身体活動量を確保したり、多様な動きを引き出す工夫がされていました。

子どものほめ方、しかり方

→具体的にいろいろな成長をほめる。しかるのではなく反道徳的なことと危険なこと

ポジティブな関わり方を認め、全体へ広めるようにしていました。また、ルールを守らない子や話を聞かない子など、約束を守らない子どもをしかることの大切さも伝えていました。



こちらは風船を新聞で囲ったボール。転がりにくく、手ではじきやすい



ボールをよける「転がしドッジ」



「転がしドッジ」で使用したボール。ビニール袋に新聞を詰めてボールを作成。児童にとっては、転がりにくいのがポイント